

Summa Archaeologica

稻垣足穂大全

Ⅲ

現代思潮社

稻垣足穂大全Ⅲ

定價 貳千圓

發行 一九六九年十一月二十八日

一九七二年九月二〇日再版

著者 稻垣足穂

發行所 株式會社現代思潮社 東京都文京區小日向一―二四―八

電話(九四三)四四〇六(代表) 振替／東京七二四四二

郵便番號 一一二

© Taruho Inagaki

本文印刷 東京創文社

裝本印刷 形成社

製本 橋本製本所

製函 石黒紙器製作所

稻垣足穂大全Ⅲ

目次

A 感覚とV 感覚

2

異物と滑翔

42

一 玉子少年

二 塔下の対話

三 春の鳥

Prostata ~ Rectum 機械学

70

はしがき

第一部 幼少年期オートエロティシズム

第二部 女性は果たして臀部を了解するか

澄江堂河童談義

124

『稚児之草子』私解

148

秋夜長物語

170

北山の春

192

山シ 本五郎左衛門只今退散仕る

214

七月ツイタチカラ六日迄

七タヨリオ盆マデ

十八日ヨリ廿六日マデ

廿六日ヨリミソカ迄

少年愛の美学

256

はしがき

第一章 幼少年的ヒップナイド

第二章 A 感覚の抽象化

第三章 高野六十辺智八十

稲垣足穂大作品年譜 松村實

256

Summa Tarchologica

A 感覚とV 感覚

万の虫迄も若契の形をあらはすがゆへに日本を蜻蛉国ともいへり——本朝若風俗——

その一

昭和二年四月某日、一期一会の澄江堂先生は、私と面を合わせた時、「君も一つ、永遠に美少年なるもの我をひきて往かしむ、を書くことだね」と云ったのです。何もいきなり、ねりぎだの紙シャボンだのを持ち出したわけではありません。——こんなぐあいに、私は、『澄江堂河童談義』について訂正増補しながら、今回の主題にはいつて行きたいと思う。ところで読者があの作を読んでくれたら好都合であるけれども、そうでなくても差支えないように、筆を進めるつもりだ。

いまの、「美少年なるもの云々」のあとを受けて、澄江堂主人が、曾て野上君とやらの許で見たという古い彩色画のことを聞かせる所がある。彼は田端の、あの薄暗い二階書齋で、身体を前方にかがめてお辞儀の恰好を示し、ついで右足を座布団から側方にずらした。実はそのようにすると同時に、畳の上に突ツ立てた刀の鞘に取りすがっているふうをも彼は見せたのである。すなわち、その画中の二人物中の一方の若衆は、このようにして緒のついた朱鞘を両手に握りしめているが、そこに何とも云えぬ可憐な風情があつて、あれなら自分だって心を動かさぬとも限らない……そんな感想がそこにつけ加えられた。——この一事は省かれてはならない。何故って、この種の版画に見る女性はやって懐紙な

どを口に啞えているけれど、そんなことより刀の鞘につかまっている方がずっとおもしろいからだ。『好色五人女』第五話に出てくるおまんが、中刺をして、若衆姿に身をやつし、道に迷った振りをして山中の源五兵衛入道の庵を訪れる。経机の上の一冊、待宵諸袖というのを、おまんが眼にとめて、「立派に物はおっしゃって、それ、その本が承知せぬ。それを常住読まれるからにはまだその色、棄てぬにきまった！」と脅迫されて、入道は余儀なくなり、「念者になろう」「懇ろしよう」とばかり抱き合せて、次に源五兵衛入道が紙入から何やら取出して口の中に入れて嚙みしめるのを、何したまうと問うたら、入道は赤面してそのまま隠してしまった。この当の品物が、前の黄蜀葵根であるが、この興味ある場面には、『情はあちらこちらの違ひ』との見出しがついている。ところで、あちらとは、私によると小倉百人一首で、こちらとは弓矢の道、及して茶ノ湯、能楽の世界にも通じる。——このような理論をこれから持ち出そうとする。だから、暫くついてきてくれるところの忍耐と、若干の想像力の振興を、私はいま読者諸兄姉に約束してほしい。

次に、私が、宇治山の上に立つ白い夏雲を眺めながら、X夫人に向っておしりの哲学を、——つまり、そもそも臀部とは人体にあつて最も愛嬌のある、福々しい、いついまでも齢を重ねないような部分であると説きはじめるが、この両山のためたさについて、私はあそこに次のような引例をするはずであった。

曾て南太平洋のクラカトー火山が大爆発したさい、噴出した灰が空気の上層にあがって、そのために地球上に数週間に亘って、世にもない妖美な夕映が織出されたと云う。私がさる年、神奈川県鶴見の海岸で経験したもの、それは人為の災禍であつたけれど、やはり天象の美が伴った。四辺が晦冥になって、足許は夕月夜の覺束なさになり、わずか西方に透いている茜色の地平線上に、富士山の裾が見え、それから左方へ九十度の所に、この世ならぬかそけさで藍色に浮き出した上総の山々があつた。真暗な空の奥から無尽蔵に降りこぼれてくる何物か見当のつかない、無数の大葉のもえがらは、もしダンテが『地獄篇』の中に描いてるとしたらちやうどそれに当るとも受取れる、そんな怪異な雪片として

眼に映じた。しかし以上は、ひと息ついたとき初めて気がついたので、そのはじめ、ダークエンゼルの羽搏きが穹窿をおおい、隊伍を組んだ黒いつばさがあとからあとへ繰出されてきたとたん、これは何とかせねばならんとさすがの私もあわてないでおられなかった。お祈りなんかリアルでない。この上はなにか最も生命的な、若々しいものを頭に浮べて、それに取すがっているより他はないと考えたのであるが、これと符牒を合わしたように、壕の奥に腰をおろしている私の鼻先に、寸の詰った紺木綿のズボンに包まれ、それゆえ桃のようなわれ目を見せたおしりがあった。丸く軟らかに、しかも弾んだ部分が小刻みに顫えている。女の子があっち向きに、そこに突立って泣きじゃくっているのだった。こんな学徒は自動車会社お手のものの大型車に乗せていち早く総持寺方面の山林へ避難させたはずであったが、そのトラックに乗りそぐねた連中の一人であった。ただッぴろい機械工場の屋根一面に固形の雨の降りそぐ轟々の音がひびき、壕の入口に立っていた同僚の手首からはいまでも血がふき出した。破片が当たったのである。……そして私は一生懸命に、くつきりとすじのついた顫える桃の実に顔を差寄せていたあいだに、最も恐ろしい最初の十五分間が打ち過ぎた。――

戦争が終って、『酒客早晨嘔吐症』がまたしても我身を襲うようになった。この、空への発作にたいしては、何でもいい、手近にある香りの強いもの、たとえば石鹼函を取って嗅ぐより他に手はないのであるが、そんな応急措置をとる時には、いつしかそこに、桃のようなすじのついた臀部の幻想が伴っている一事に、私は気がついた。いや、そうでない。同じシャボンの匂いであっても、風呂上りの桜色のおしりの肌にいったん移されているそれだと想像する時に、効果百パーセントであることを、私は知ったのである。

――さて、傾聴者X夫人は、その後われわれが岡崎公園を抜けていた時、動物園の看板を見てブツと噴き出した。で、この件も彼女の口から先廻りして吐かせることにしよう。動物のおしりは人間のそれのようにふっくらとしていない、私がそう云ったのにたいする彼女の抗議である。

「じゃ縞馬はどうですの。しま馬のおしりはすてきじゃありませんか？」

私は徐ろに云い続ける――

「口の中から煙を吐き出すのだって、爪をとがらせて紅をつけて磨くのだって、共にアクマの趣味ですね。かんざし代りに金色のツノを髪に挿し、キバ形の金冠を両方の犬歯にかぶせたらどうでしょうか？ 縞馬といえど、僕はいつか婦人用縞馬パンツを考えたことがありますよ。この薄いパンツの裏側にはＹの字にゴムテープが縫い付けられていて、これによってパンツを太股のつけ根にそうて密着させ、同時に縞柄を肌のおもてにぴったりまんべんなくおし拡げることになります。紋様は後方の、両岸が密着している谷底から放射さるべきです。これがシャツの場合ならばおへそが中心でしようけれど、でも、このおへそはつまりヘタですから、人間もまだ蔓つきのうちのことで、いったんお母さんのお腹の中から外へ出てしまえば、人体のかなめは他の場所へ移動するのが至当でしょう。口では不可です。口唇にはしよちゅう忙しい用があります。口とは反対側、そこそわりかた暇であり、したがってわれわれの『内部』への関心の門戸だとしなければなりません。――で、縞馬のすじは、そのかなめ所が存在する谷間から出て、二箇の円丘をこえて恰も旭日旗の光条のように腰まわりにひろがります。ところで貴女が、こんな風変りなパンツを百貨店の売店で見かけになり、くると裏返して、Ｙ字形ゴムの柄の部分にくっついてるラムネの玉のようなものを、そうです、ホホジキの萼を裂いて内部から丸坊主を出すように、そのラムネの玉をお出しになって、これはいったい何なのとおたずねになったら、売子は説明することでしょう。つまり、縞模様がズレないように、肉体のボタン孔へはめこむ丸ボタンですとね。――縞馬に限りません。パンツ乃至パンティを正しく身につけようというには、今云ったホホジキをつけただけでいい。先日、丹波橋駅のプラットホームで見たのですが、それは近江舞子だかマイアミだかの広告ポスターで、紅い水着姿の少女が白砂の浜べに佇んでいる所でした。こんな人物のおへその下方に小さな凸起があったらどんなものだろう

……と思いましたよ。戦場で肉体中のかんじんなものを失った兵士らのために、非常に精巧な素肌用のベルトが発案されていると聞いたことがあります、つまりそのやり方を倣った、じかにつけるゴムバンド、しかもこちらはどこまでも一つのアクセサリーを出ません。——或るしかめつらの謹厳な紳士が、某日、何のつもりか相好を崩して僕に云いかれました、『何しろ日本には陰間なんていう優美なものがあるんですからね』——この江戸時代のやさしき連中は、ひとしく羽二重をしめつけて、以て男性のいやらしい特徴をおさえ隠していたと伝えられますが、これとはあべこべの効果をも、そのゴム・ベルトによって出してみよう、と僕は云うのです。酔払うと屋根の上に登って、おどろいたことに鶏卵を、四箇も、立て続けに生むくせがあるというバレエダンサーのことが、三島由紀夫さんの『禁色』の中にちょっと紹介されています。彼はむしろ男性で、そんな芸当を、たぶん彼の師匠でもあれば同時に愛人らしい某フランス紳士から教わったものに相違ありません。何故なら、むかし伝馬町の牢屋では、新入者がお土産の金子を例の所へ隠匿して持つてはいったなどという話を僕は聞いていますが、玉子云々はまた余りに日本人離れしていて、ダンサー本人が思い付いたことだとは到底考えられないからです。もっとも歌舞伎の暫や菅原伝授の舞台に出てくるような人物が、大仰な写楽式の身振りでそんな「玉子生み」をやったのけたらどんな効果が出るか、それは保証の限りではありませんがね。

——僕はこれによって考えましたが、舞台上に立った美女がうしろ向きになって、尻無しパンツの合間から、金だの、銀だの、紅や紫や緑の（イースターエッグを生むというのですか？ 縞馬パンツにしたって、そこに短かい尻尾が工夫出来ませんか知ら？ むろん前のタマゴの演技には燕尾服の介添役がいて、この男の手品らしいのだが、どうも見抜かれない。色玉子は籠の中にうず高く積上げられるのですから。パンツの尻尾だって例のホボツキと関係があるらしい。それにしてもどうしてあんなにびんこびんこ自由自在に動くのであろう？

「引緊った、偉大なおしりをがっちり引受けるサドルのついた強馬力のオートバイへの憧れ」——ジャン・ジュネの『泥

棒日記』の中に書き入れてあります。こんな、巨きな貝殻をひき伸したような革製の鞍がついたモーターサイクルにしろ、鰐皮のガマロミたいにきゃしゃな股挟みのついたレイサーにしろ、四本脚の毒蜘蛛のような競走自動車にしろ、消防車にしろ、ブルドーザーにしろ、ジェット機にしろ、機関車にしろ、すべて冒険的な乗物の魅力は、ひとえに搭乗席における危険感と冷酷性に正比例しています。云いかえると、おしりを載つける台が冷ややかにいかつく、いかにそれが当方の臀部に対してつれないかという度合にあるようです。たとい座席が贅沢に快適に出来ている場合であっても、却ってそんな慰安が与えられているだけ、当方には責任と決意が期待されることになるのですから、依然として冷酷性にはありません。そして一般女性はこの辺の事情について了解があるはずですよ。というのは彼女らにはV感覚があつて、これが仲介になるからですが、僕に云わせると、そのV感覚とは実はA感覚から分岐したものに他なりません。だから、あの人のおしりは恰好がよいとか、あの汽船の後部の曲面は何とも云えない、スクールの白浪が盛上っているあたりが豪奢だねとか云うのは、すべてA感覚を根拠にしているのです。広く椅子や腰掛類への関心だつてその通りで、それが何であつてもともかくそこに在るものの上におしりを置いてみたいというのは、A感覚が自己証明としてそのように唆かすからに他なりません。僕はいつの頃からか、或る種の男性の相貌中に、それがV感覚への顧慮でもなければP感覚の悩みでもないような、翳^{かげ}りを読み取っています。たぶん子供の時分よく出入したお医者さん、それは僕の父の友人でしたが、その玄関でたびたび顔を合せたコウジ屋の、――酒、しょうゆ、味噌を作るのに用いるあれですが、その古い麴屋の若主人の表情にしばしば注意した……あの時以来のことのように自分では思っています。先方が厚司姿のままクスリ臭い場所にやってくるのは痔の治療のためだということがよく判っていたので、僕は、この人があの冷々した黒革張の診察台の上に横たわつて、それからいったいどんなことをされるのだろうと、彼の面を盗み見ながら、あれこれと想像を逞しくしたのですが、相手の眼の周りにいつでも見かけられた黒ずんだ隈……これは、夕方な

ど芸者と連れ立った彼を街角に見ることがありましたから、あるいはそんな関係かも知れぬ、と思いました。でもそれとは別なものが、たしかに、彼の相貌の中にあつたのです。それは痔に直接につながつたものでなく、痔につながりのある、消息しそくに係かひしているところの或る物だと云うべきでしょう。いったい女の人の顔や子供たちの面貌は、A 感覚的だと云えます。女性にあつてはA 感覚とV 感覚が並存していますが、たいていの人はそこにV 感覚しか読み取りません。

しかし見逃がされているA 感覚は、いったん注意を西洋婦人の顔面に向けた時に、より容易に判じられるでしょう。西洋人は総体に、容貌もそうですが、おしりなんかも堂々としていて、加うるに露出症の傾きがあつて、A 感覚的存在だと云えるようです。彼らが椅子族だからでしょうか、それとも子供の頃から懲罰としてのお臀おしり打ちうちを持っているからでしょうか。からだの線にそうして仕立てた洋服のせいでしょうか？ それに西洋人は大柄で鬼に似ています。ゲーテの『フアウスト』前篇の終りにあるヨハネ節前夜の魔の宴いさみのよひには、臀見鬼人おしりみおにというのが出てきます。『聖アントワンの誘惑』の絵にあるアクマの中にも、お尻から火焰を吐いたり、他の者の上に跨またつてそのおしりに矛の柄を突き込んで拍車代りに駆立てているのが見つかります。——よくドイツの医学書に、べらぼうに大きな浣腸器を片手にした中世風のドクターが、半裸の女患者を前にしてひかえている銅版画がついていますが、この先生なんか明らかに臀見鬼人ではないでしょうか……西洋人の顔に窺うかがわれるA 感覚には、陰獣めく光が隠かくされていて、ひょっとして偶像イデオール姦かんでないか、あるいは死屍シシ愛好イライもやりかねないと思われるようなものすら、僕は時たまに見受けます。翻訳して云うならば、浪人が孤独の住いで唯一の相手である若衆人形の髪を結むすつてやる……それから秋成の『青頭巾』……でも僕に興味があるのは、政治家とか、軍人とか、学者とか、そういう最も男らしい男性の面貌に表あらわれている抑圧されたA 感覚です。児童及び婦人の相貌中のA 感覚は、只完成しつぎょうされない快感を感じさせるだけです、こちらはそうでなく、いずれも、例えばより多く忍耐を必要とするいとなみ、あるいは成果おぼつかなき底の事業への打ち込みのために、等しく絶望的に押し潰つぶされひんまげら

れています。西洋人は物質的だと云われます。物質とは、そこに滞ろうとする、あるいは滞ってしまった精神に他なりませんから、こんなものは、絶えずおし進められねばならぬという条件が加わります。葛藤軋轢の姿は、東洋人よりは西洋人の上に常に興味深くうかがわれるものです。そして彼らのこのような苦吟と、彼らの道徳的節制、犠牲的行為、抽象的思考、独創的芸術とのあいだには、たしかに或る関連がなければならぬことをおもわせるのです。……便所もあちらは腰掛ですが、日本は、恰も天地間に跨るように、黒暗々とした長方形の空隙の両辺をふんまえて跨ります。ここにお聞かせしたいことがありました。僕は先日、『正法眼蔵』中にこれを見つけました——」

「樹下とか吹通しの場所で修行する時は、近くの谷間か河水かによらねばならんが、先ず衣を脱いでたたんでおいて、黒でない、黄色い土をえらび取って、大豆くらいの大きさに丸めたのを、石上とか樹根とかに、七箇つつ二列に、都合十四箇ならべる。次に磨き石を一つ。さて用を足し、ヘラなり紙なりを用いてから、水辺で洗うが、先に用意した十四丸のうちの三箇を取って、これを用いて洗う。一丸を掌にのせ、水を加え、泥よりは薄目に、上澄うすずみほどにしてまず小便した方をきよめる。次の一丸も同様に溶いて……

寺にはトイレがある。この時は手巾を左ひちに掛けて行き、そこにある竹竿に掛ける。手巾は長さ一丈二尺、白色は不可。竹竿へは二重に折ってかける。若し袈裟をつけていたらやはりそれを脱いで、手巾にならべてかける。落ちたりせぬように。また投げかけたりなどしてはならぬ。

番号の紙片が環形になって竿に付いている。どこに自分の衣をかけたかをよく憶えておく。人数の多いときは竿の順序を乱してはいけない。立ちつらなるようなことがあったら他の者にたいして礼をするが、なにも向い合って軀を曲げねばならぬことはない。差し交した両手を胸の前に当てて会釈するだけでよろしい。別に法衣をつけていなくても、便所では互いに会釈するものである。若し、両手ともに未だ触れない前で、しかも物を携えていなかったならば、両手を

交叉して、また既に片手を触れた場合で、他の手に物を持っていなかったら、一手をあおむけにして指先をかめて水をすくう恰好を示し、頭を下げる。先方がそのようにしたらこちらも同様に返す。当方がこのようにやれば向うも同様。

——上衣を竿にかけるには、法衣を脱いで両袖をうしろに合し……袖だたみにして、袖の方を向うに投げこす。すでにかけられた手巾の両はしを互い違いにして衣を越して、こちら側でまたちがえて、しっかり結ぶ。衣に向って合掌し、タスキを取って両肘にかけ、桶が並べてある所へ行き、一つの手桶に水を盛って廁へはいるが、水は九分にする。廁の戸の前で木履に履きかえるが、この場合、脱いだ履物は爪先を揃えて、自分から見て先方へ向けておく。便所へ夙くから行っているのは不可ない。といって、さあとなって駆け込むのも不可。廁に入って左手で門扉をおす。ついで手桶の水をほんの少し、下方のたんごの中へこぼすが、手桶を眼前において、立ったまま槽に向って、三度指をはじく。指先で音を立てるのは不浄除去のためである。このさい、左手はこぶしに握って左腰につけていること。次に下袴の口、衣のかどを取りひろげ、くつろげて、入口に向って両足で槽の両辺をふんまえて、しゃがむ。前後にかけてはならぬ。ふちをよごすべからず。この間、壁越しに談笑したり、うたを唄ったり、鼻汁を嚙ったり、唾を吐いたり、壁面に字をかいたり、ヘラで床上にいたずらがきをしたりしてはいけない。——用足しが終ったらヘラを使う。紙でも差支えないが、反古紙は不可。文字の書いてある紙も用いてはならぬ。更に、未使用のヘラと使用済みのヘラとを取違えないこと。——ヘラは長さ八寸で、三角形に作つてある。太さは親指くらい。漆塗りがあり、素地のままのものもある。未使用のヘラは槽の前のヘラ掛にかけられてある。ヘラ乃至紙を使用してから、右手に手桶を取って左手をよく濡らし、柄杓で掬する要領で水を受け、まず小便の方を洗う。これが三度。ついで大便の方をきよめ濯ぐが、その間、手荒に桶を傾けて手のひらの外へ水を零し、溢れ散らせて、水を早々に費してしまふことがないように。——洗淨を終えて手桶をその場所におき、ヘラを取ってぬぐい乾かせる。次に右手で袴口と衣のかどを引きつくるって、右手に桶をさげて廁の門を出るつ

いでに、専用の木履を自分の麻裏草履とはきかえる。手桶を元に返し、手を洗うが、これには先ず右手に灰匙を取り、灰をすくってそこにある瓦あるいは平らな石のおもてにおき、右手にたらした水を受取って、砥石に当てて研ぐように、触れた手を洗う。灰を以て三度、土に換え、水洗いがやはり三度。終るとさいかちを取って小桶の水の中へ浸し、両手をしていねいに揉み洗う。腕の辺りまでよくよく洗うのである。誠心を保ち、いんぎんに、灰三、土三、さいかち一、都合七度を以て適當とする。次には大桶による洗浄である。水でも湯でもかまわない。一回洗ってその水を小桶に移し、更に新規の水と取換えて両手を洗う。杓子を取るには必ず右手でなければならぬが、桶にぶつかって音を立てたりしないように。水を零し、さいかちを散らし、四辺を濡してはならぬ。最後に、供えつけの手巾が私用のそれかを手を拭うが、これを終えたのち、衣を懸けた場所へ行き、タスキを外して竿にかけ、合掌してから手巾の結びを解き、法衣を取って身につける。それから手巾を左肘に掛けて塗香する。これは、香木を六角の宝瓶状に作ったもので、拇指大で、長さは指四本ならべた巾。一尺ばかりの細緒が両端から孔に通して、竿にかけてある。この六角柱を両の掌に挟んで揉み合わすと、香氣がおのずから両手に移る。タスキを竿に戻すときは、同じものの上にかけて纏れたりしないように。以上のすべては審らかにすべきで、心せわしく早く用を済ませて帰ろうなどいう丁見でやつてはならぬ。また他の衆がきているのをじろじろ見たりしてはいけない。廁中の洗ひ水は冷水がよい。熱湯は腸風を引き起す——」

さいかちとは昔のシャボンのことであると判ったが、腸風には見当がつかない。若し以上のあらましをX夫人に聞かせてきたとすれば、「どうも下痢とも違うようですし、痔を引き起すというのでもないらしいですね」とコトバを入れるべきだろう。

「それは……あの、百日の説法何とやらの、あれではないのでしょうか」
このように相手に口を挟ませる。